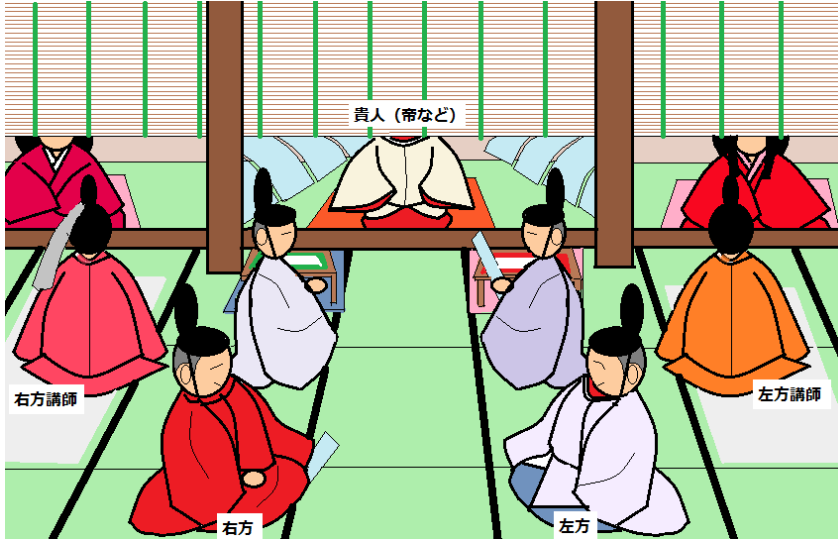


『古今著聞集』「小式部内侍が大江山の歌の事」に関する事項①

(授業では、あまり詳しく説明できない事柄をこの機会に触れてみたいと思います。)

歌合

☞そもそもこの話は「歌合」という催しを舞台に展開されます。



〈歌合イメージ図…ちょっと適当です(-.-)〉

歌合せとは?!

複数の歌人が詠んだ歌を、二首ずつ組み合わせ、優劣を決める催し。

九世紀末から行われ、平安期に流行。

参加者全員を**左方 (ひだりかた)**・**右方 (みぎかた)**に分け、それぞれの勝ち数を総合して集団で競うことが多かった。

勝敗は合議で決めるか、**判者**が判定し、その理由を**判詞 (判定の詞)**として記すこともあった。

勝・負だけでなく、**持 (引き分け)**もある。『プレミアムカラー国語便覧』教研出版 参照

＜歌合に関する用語＞

* 歌題による歌が多く、前もって出しておく**兼題 (けんたい)**と、その場で出す**即題 (そくだい)**があった。

方人 (かたうど)・・・競技者 (歌合の歌を提出する者)。左右に競技者として選出される。

↑ 小式部内侍はこれになるのですかね。

(※資料によっては「方人」を次の「念人」と同一の役割で説明していたりします…。)

それぞれの方人の統率者は**頭 (とう)**と呼ばれた。

念人 (ねんじん)・・・方人の応援者。自陣の歌を褒め、敵陣の歌の欠点を指摘して議論を有利に導く。
(おもいびと) 方人と同一視されることも多い。

判者 (はんざ)・・・勝・負・持を判定して勝敗を決める。主に歌壇の重鎮が務める。
「両判」といって判者二名の場合もあった。

講師 (こうじ)・・・提出された歌を読み上げる役。

判詞 (はんし)・・・判者が優劣を判定することば。

(旺文社の古語辞典等を参照してまとめました)



当時の貴族男性に必要な教養は「和歌・管弦・漢詩」

「和歌」の素養があるかどうかは、出世にも大きく関わってきます。

歌合で優れた歌を発表して「勝」の判定を得ることは、その人物の評価にもつながる大切なことだったのです。

※教科書ではこの話の後に、歌合せで負けて(?)しまったことがもとで落胆して病気になる、ついには亡くなってしまったという人物の話が掲載されています。

男性同様、女性にとっても「和歌」の素養は大切です。

美人の絶対条件として、「長く豊かな黒髪」とあるのは有名な話ですが、モテる「素敵女子」であるために必要なのは「和歌・管弦・筆跡 (が素晴らしい)」です。

「和歌」は恋のやりとりになくてはならないもの。和歌が上手に詠めるかどうかは、結婚にも関わっていたようです。

